

病害虫防除技術情報 第1号

富山県農林水産総合技術センター所長

大麦赤かび病の防除について

本年の大麦の生育は、これまでの気温が高く推移したことから、出穂期は、平年より11日程度早く、県の平均では4月13日頃になると予測されています。

引き続き、向こう1か月の気温は高いと予想されています。

赤かび病は、出穂期以降の降雨が多いと発生が多くなることから、ほ場毎の出穂状況を見極め、適期に防除を行いましょう。

<防除対策>

- ・ 防除は穂揃期（開花始め）とその7日後の2回確実に行う。
- ・ 降雨が続く場合でも、短い晴れ間を利用して薬剤散布を行う。

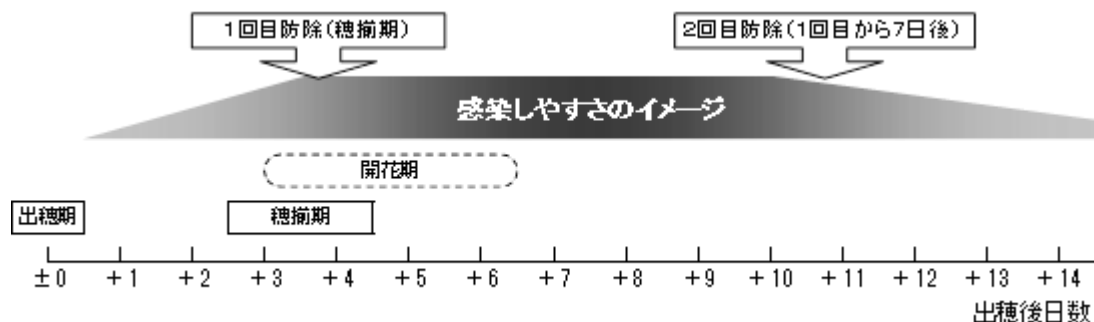
防除時期	剤型	薬剤名	希釈倍数	散布量 /10a	使用時期 (収穫何日前まで)	使用回数	QoI 注2)	系統 注4)	
1回目： 穂揃期 (開花始め)	粉剤	トップジンM粉剤DL	—	4 kg	14日	注1) 3回以内		B1	
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3		G1	
2回目： 1回目から 7日後	液剤	トップジンM水和剤	1,000~1,500倍	150 ^{g/L}	30日	注1) 3回以内		B1	
		注3) トップジンMゾル	1,500倍	150	14	注1) 3			
	（無人ヘリコプターの場合）	注3) トップジンMゾル	シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2		G1
			チルト乳剤25	1,000~2,000	150	21	1		
			ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3		
			ストロビーフロアブル	2,000~3,000	150	14	3	○	
	（無人ヘリコプターの場合）	注3) トップジンMゾル	シルバキュアフロアブル	8倍	0.8 ^{g/L}	21日	注1) 3回以内		B1
シルバキュアフロアブル			16	0.8	14	2		G1	
チルト乳剤25			8	0.8	21	1			
（無人ヘリコプターの場合）	注3) トップジンMゾル	ワークアップフロアブル	10~16	0.8	7	3			

注1) 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む

注2) 薬剤耐性菌発生防止のため、QoI剤は1作期1回までの使用とする

注3) 取り扱いメーカーによっては、適用がないので注意する

注4) 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、2回目は異なる系統の薬剤を使用する



赤かび病の感染しやすさのイメージ

－ 赤かび病の発生傾向－

赤かび病の発生する気象条件については、以下のようなことがいわれています。

- (1) 赤かび病の発生と出穂期前後の気象は重要な関係があり、多発生年はムギの出穂期以降の平均気温が18～20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合、あるいは降雨又は濃霧頻度が高い（日照時間が少ない）場合である。
- (2) 一般にムギの出穂が遅れることは、梅雨期に遭遇する公算が多くなり、発生が多くなる傾向がある。
- (3) 本病の第一次発生源である子とう殻形成が盛んになるのは、日平均気温で13℃以上、降雨のあった直後であり、子とう胞子の飛散が盛んになるのは、日最高気温で15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後である。子とう殻形成と子とう胞子飛散とはおおむね同傾向を示すから、気象調査と平行してこの調査を行い予察に利用する。

（発生予察事業調査実施基準（農林水産省植物防疫課））